

日本介護福祉学会通信

No. 79



2023年4月発行

発行：日本介護福祉学会 The Japanese Association of Research on Care and Welfare
〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 (株) 国際文献社内

第31回日本介護福祉学会について

第31回日本介護福祉学会実行委員会

第31回日本介護福祉学会大会は大阪人間科学大学において、2023年度近畿地区公開講座とも共催する形で2023年9月10日(日)にオンライン形式で開催する予定です。テーマは、「持続可能な社会に向けた介護福祉の挑戦—テクノロジーの活用」です。

なお、本年度からは参加費を徴収する予定ですが、多くの会員の皆様にご参加を頂き、盛会になるように務めてまいりますので、ご協力をお願い申し上げます。

第31回日本介護福祉学会大会 開催概要

大会テーマ 持続可能な社会に向けた介護福祉の挑戦—テクノロジーの活用

大会日時 2023年9月10日(日)

会場 オンライン(Zoom)での開催予定

主催 第31回日本介護福祉学会実行委員会

共催 2023年度近畿地区公開講座

参加費 会員3000円 非会員4000円

参加申し込み 5月上旬(予定) ※詳細決定後、学会ホームページに掲載

研究発表エントリー 5月上旬(予定) ※詳細決定後、学会ホームページに掲載

日本介護福祉学会ホームページアドレス: <http://jarcw.jp/>

【第31回日本介護福祉学会大会 実行委員会】

大会長 大野 まどか (大阪人間科学大学)

実行委員長 武田 卓也 (大阪人間科学大学)

実行委員 浅野 幸子 (大阪介護福祉士会・会長)・新井 康友 (佛教大学)

川井 太加子 (桃山学院大学)・玉井 美香 (大阪人間科学大学)

時本 ゆかり (大阪人間科学大学)・水谷 真弓 (大阪人間科学大学)

事務局長 杉原 久仁子 (桃山学院大学)

大会事務局 大阪人間科学大学 人間科学部 社会福祉学科

連載企画 「私と介護」(3)

学会通信では、66号からの「私と介護」、46号からの「介護の未来」の2企画を合体させ、合体企画として、77号からリニューアルした「私と介護」の連載企画を開始することとしました。今回は企画第3弾です。

介護実践を表現する 「言葉」へのこだわり

鈴木俊文

(静岡県立大学短期大学部社会福祉学科 教授)

日本介護福祉学会事務局次長



○はじめに

私は、介護老人保健施設の介護職員や認知症高齢者グループホームの管理者(ホーム長)、介護支援専門員等として、介護保険サービスにかかわる実務経験を重ねた後、現在は大学教員として介護福祉士養成教育における科目担当や、社会福祉士養成教育における卒業研究等を担当しています。

2019年から2年ほど、厚生労働省で勤務していた経験があることから、周囲から「政策研究に注力している研究者？」と質問されることが多いのですが、研究活動の力点は専ら介護現場をフィールドに福祉実践のリアリティに迫る質的研究に取り組んでいます。私のゼミ生も卒業生を含めて全員が福祉実践をテーマにフィールドワークを行いながら質的研究に取り組んでおり、私と介護のあいだには、常に質的研究活動が存在しています。

○言葉で「意味」を表すこと

読書好きの私は生活のあらゆる場面を本とともに過ごしています。その大半は、授業の準備や研究で向き合うテキスト、専門書などが中心です。大学教員になってからは学生が授業後に提出するふりかえりレポートに関心高く、授業評価のほか、学生が活用している文章表現から、学生の関心や学習の方向を理解(深く解釈)しようと「類語辞典」を眺める機会が多くなりました。この類語辞典、私が大学院生の頃に指導教員からのおススメとして紹介されたものですが、大学院生時代に限らず、今でも類語辞典は私にとって欠かせない相棒になっています。

私と同様に研究活動に「類語辞典」を活用している方はどれくらいいるのでしょうか。この辞典、非常に面白いです。質的研究を専門に活動している私は、ケア現場を舞台に、そこに立ち現われる現象を言葉に

おきかえる活動に膨大なエネルギーを注いでいます。この活動は、既存の専門用語をもとに演繹的に事象を捉える活動というより、観えるもの、感じとれるものすべてを一体的な「現象」や「事象」として帰納的に捉え、抽象化する思考や主観と格闘しながら「まさにこれ！」という「言葉」を掴み、説明力を高める活動と言えます。例えば、目の前にいる要介護者の「歩行」という活動を「歩いている」と捉えるのか、「めいっばいの力を込めて一步をふみだした」と捉えるのか、あるいは「ようやく歩くことができるようになった」と捉えるのか、これらは、現象や事象を深く解釈する意味づけによって、表現すべき言葉が変わってきます。これは、単にヒトの動きを観ているだけではならず、状況の全体性や目には映らない人の「息遣い」、流れている個人の「物語」みたいなものを深く解釈することが必要です。このような深い解釈をとおして生みだされる言葉は、その情景が色濃く浮かび上がり、そこに根付く感情の動きや温度までも感じとれることがあります。質的研究ではこのような活動をとおして捉える分析結果を「概念」という言葉で説明することがありますが、この「概念」を生成する時に、なかなか現象や事象にフィットする言葉が見つからず、「類語辞典」を活用することも多いです。

ちなみに、「概念」という言葉に馴染みがないという方は、この言葉を辞書でひくと、おそらく「物事の概括的な意味内容」や「事物の本質をとらえる思考の形式」などと説明されているものが多いと思います。これを見て「??」と思った方も、類語辞典でこの「概念」に類似する言葉や表現を調べていくと「観念」「表象」「哲」「イメージ」などの並びを発見できます。「なるほど」と頷けるのではないのでしょうか。表象からイメージへの流れを辿れば概念の理解がこんなにも深まる類語辞典、本当によく出来た辞典です。

このことについて、先日担当しました介護教員講習会で話題にしたところ、研修内容以上に、この類語辞

典の活用に関する話が響き、受講していただいた先生方のふりかえりレポートの内容は、この類語辞典の話題でびっしりでした。このことから、介護にかかわる教育活動においても、表現する言葉に苦慮する現実があることを改めて痛感したところです。

○言葉の力で介護実践を支えたい

介護実践は、認知症ケアをはじめ、言語での明確な関わりを得ることが難しい実践が数多く存在します。私自身も実務経験を重ねる中で介護実践に必要な基礎的知識を超えて、ある種の「感覚的な情報」を手がかりにして、展開していかざるを得ない場面に数多く対峙してきました。このような感覚的な情報は、基礎的知識とは異なり、明確に説明することが困難な場合が多いですが、基礎的知識以上にケアの根拠となって、実践を生み出し方向づけている要素と感じています。つまり、介護保険サービスで言えば、ケアプランで扱われる情報やアセスメントとしては具体的に明示されにくいながらも、確実に介護の対象者とのかかわりの中で体感され、ケアの根拠や評価、判断として活用されている感覚的な情報であると考えています。

私はこのような感覚的な情報や判断を、ケアの質にかかわる「課題と可能性」と捉え、介護実践者がケア場面で経験している「実践感覚」に焦点をあて、それらを言語化する研究活動や教育活動に、これらからも注力していきたいと考えています。

介護実践は、まだまだ言語化されていない暗黙知が数多く存在する領域です。質的研究を通じて、介護の対象となる人、場、支援実践を支える「言葉」を創出し、様々な観点で議論を深めていくことは介護福祉学の構築に欠かすことが出来ない研究活動のひとつと理解しています。介護福祉実践を表現する言葉へのこだわりを、学会員の皆様と共に様々な活動から追及していきたいです。

国際交流委員会企画(2)



国内外で介護や福祉分野の国際関係のお仕事を
されている方へのインタビュー企画第2弾！

国際交流委員会では、国内外で介護や福祉分野の国際関係のお仕事をされている方へのインタビューをzoomで企画しました！コロナ禍で海外に行き来することが難しい状況ですが、インタビューの内容を通して、少しでも海外を身近に感じてもらえたと思います。

今回のインタビューー 福井 貞亮さん(アメリカ合衆国在住)

インタビュアー 古川・綾部(国際交流委員)

綾部:本日はよろしくお願いします。福井さん、自己紹介をお願いいたします。

福井:現在、アメリカ合衆国のインディアナ州にあるインディアナ大学社会福祉学部社会福祉学科で教員として勤めております。福井です。よろしくお願いいたします。

古川:福井さんはアメリカでの仕事や生活をされていますが、何年になるのですか？

福井:2006年3月からですので、今年で17年目になります。

綾部:現在の勤務先や生活の様子を少し話していただけますでしょうか

月から完全オンラインのZoomで行っていましたが、2021年からは対面授業に戻っています。

現在の研究は、福祉の専門職のスーパービジョン、バーンアウト、離職や、共同意思決定等に関するテーマに取り組んでいます。

2017年にインディアナ大学での転職を機に、それまでいたカンザス州から、インディアナ州に家族と引っ越ししてきました。今年でインディアナでの生活も6年目に入ります。日常生活では、日本人に会うことはあまりないです。

古川:どのような流れで海外のアメリカでの仕事や生活することになったのでしょうか？

☆現在のアメリカでの生活や勤務先☆

福井:今はインディアナ大学社会福祉学部社会福祉学科で教員として勤務しています。

現在は、博士課程の学生を中心に統計を教えています。修士課程の学生には、社会福祉評価方法論等も教えています。博士課程の学生は、インターナショナルの学生も多く、遠いところだとアフリカから学びにきている学生もいます。学生の多くは、博士号取得後は、教育機関や研究機関、あるいは現場の管理職として就職します。コロナ禍の影響で、授業は2000年3月

☆青年海外協力隊の海外活動へ関心のきっかけから、国内での大学や大学院を経て活動の場を海外へ☆

福井:私は高校時代、発展途上国での井戸掘りや青年海外協力隊等に興味があり、また、家族や親類で大学進学者もいなかったことから、大学進学についてはあまり考えていませんでした。当時の高校の恩師からの助言で、もう少し知識を増やした上で考えてみては、ということで、関西にある大学に進学しました。大学では高齢者福祉等を学んでいました。大学在学中も青年海外協力隊への思いはあきらめきれません



所属大学のキャンパス

でした。大学4年次には、就職活動はせずに青年海外協力隊に応募したのですが、残念ながら希望はかないませんでした。その時に、当時の大学の指導教授から大学院の情報や紹介をいただき、大阪の大学院に進学することになりました。大学院では、特に高齢者領域をテーマにした研究を中心に学び、修士号と博士号を取得しました。博士号取得後、海外での活動や学びに対する思いもまだ強く、日本での就職を選択せず、海外に行くことに決めました。海外での活動先の候補としては、ストレングスモデルの開発者として日本でも知られているチャールズ・ラップ博士が所属するアメリカのカンザス大学と、高齢者分野で研究が活発なミシガン大学にしばらくしました。両大学に、客員研究員として受け入れが可能かの問い合わせメールを送りました。両大学からのメールの返信は早く、受け入れの許可をいただく等の流れもスムーズでした。客員研究員としての滞在可能な期間のことも考え、より長く滞在が可能なカンザス大学を選択しました。2005年の12月に博士号を取得したあと、2006年3月に、カンザス大学へ客員研究員として行くことになりました。カンザスの空港に到着した際には、カンザス大学社会福祉学部の学部長が、自ら車を運転し迎えに来てくださったことを今でもよく覚えています。当時は、英語の聞き取りも苦勞する状態でした。最初の半年間くらいは、無給の客員研究員としてチャールズ・ラップ博士の研究室で研究のサポートをしていました。客員研究員としてのビザの期限がきれるタイミングで、ラップ博士の方から、滞在を延長し研究する希望はあるかとお誘い

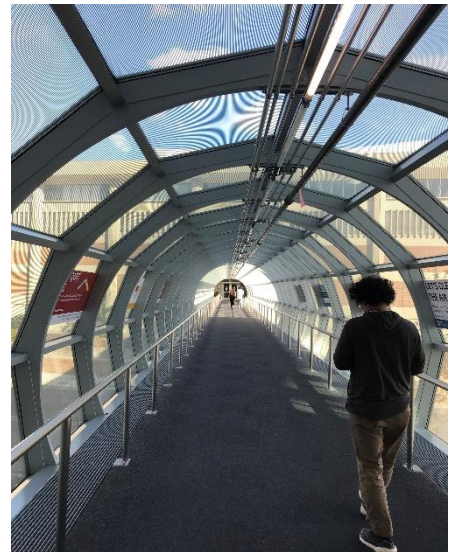
を頂き、給与付の研究員として働くことになりました。カンザス州からの研究費助成をうけ、カンザス州にある26か所の地域精神保健センターでのストレングスモデルの評価研究等を実施していました。その後、カンザス大学の調査・研究方法論研究所や、精神保健研究所での研究長等を担い、11年間、カンザス大学に所属していました。日本で受けた大学や大学院での教育がアメリカでの研究活動の支えになっており、日本の恩師に感謝しています。アメリカの大学や大学院で学ぶ学生達への教育を通して、これまで自分が学んできたことの恩返しができればと、アメリカでソーシャルワーク教育にも関心を抱きはじめました。ただ、アメリカでは、ソーシャルワーク分野の大学の学部や大学院での教授職の要件として、アメリカの大学院でのソーシャルワークの修士号(Master of Social Work)が必要となります。そのため、2015年に、アメリカのカンザス大学で、ソーシャルワークの修士号を取得することを決意し、当時は、研究長としてフルタイムの仕事と、妻と伴に二人の娘の子育てにも追われながら、本当に忙しい二年間を過ごしました。その後、2017年に現在のインディアナ大学での准教授としての転職が決まり、現在に至ります。

綾部:福井さんが取り組まれてきたストレングスモデルは、精神障がい者の分野だけでなく、高齢者や児童の分野でも必要不可欠な視点だと思います。日本でもストレングスをキーワードにした論文が報告されています。



📍 所属大学内の
学生センター

📍 校舎間の
移動設備空間
(福井さんご本人も
写っています)



福井:そうですね。ストレングス視点というのは、介護・福祉支援を展開するうえで基盤となる最も重要な要素だと思います。援助者が、クライアントのゴール(人生や生活目標等)やストレングスを理解する視点はとても大事だと思います。カンザス大学社会福祉学部で取り組まれていたストレングスモデルのユニークな特長は、そういった視点に留まるのではなく、どのように実行レベルへと展開していくのかという点で、具体的なモデルを示したのがオリジナルティの高さだと思います。ただ単に、利用者のストレングスやゴールを理解しましょうというだけではなく、具体的にどのようにストレングスをアセスメントし、どのようにプランニングしていくのか、そのための、ストレングスモデルのアセスメント票の開発であったり、クライアントのストレングスとゴールを中心に、どのようにアクションステップやプランを立てていくのかといったツールの開発、また、実践者を支援するために、クライアントのストレングスを中心としたスーパービジョン体制や仕組みの開発、ストレングスモデルの忠実度・フィデリティ尺度(どこまで忠実に実践を行っているのかモニタリングとサポート)の開発といった、ストレングス視点をストレングス支援実践につなげていく、つまり、具体的で効果のある支援を展開させていく実践方法と評価方法の仕方を明確にした

ことに、カンザス大学が示したストレングスモデルの強さがあると思います。

☆アメリカでの仕事を通してみえる日本の介護や福祉の研究や現場、当学会や学会通信の読者へのメッセージ☆

古川:ストレングスモデルの特長について、わかりやすくお話しいただきありがとうございます。最後に当学会の会員や学会通信の読者へのメッセージをお願いします。

福井:介護は、「気づき」、例えば、どこまでクライアントのゴールやストレングス、状態や状況、背景に気づけるのかが重要だと思います。アメリカでの仕事や生活を通して、多様な文化背景をもつ人々とかかわるなかで感じるのは、日本の介護支援専門職者には、日本の文化的な土壌で培われた「気づき」のセンスがある人も多いのではないかなあという印象です。相手の言動の文脈や背景を読みとろうと努力したり、相手への「気づき」の感覚が、介護場面の実践にも生かされているのではないかなあという印象です。もちろん、援助者は、「気づき」における自身のバイアスもあると思いますので、クライアントの意向の確認が大変重要です。こういった、日本の援助専門職者の持つストレングスから、海外の実践者や研究者が学べ

所属学科のフロア
(各教員の研究室と学生と教
員のための談話スペース)



るところも多いのではないかなあと感じます。ただ、日本の介護現場での実践者や教育機関で働く先生からお話を伺っていると、こういった日本の介護現場の実践や研究の強さをアピールをしていく上での難しさもあるように感じます。例えば、アメリカでは、根拠に基づく実践(エビデンス・ベースド・プラクティス)の重要性を非常に強調した教育が行われていますので、介護・福祉現場でのその必要性もより広く認知されている傾向があるようにも感じます。こういった背景から、アメリカでは、実践の評価や研究に対する現場の理解や協力も得やすいと感じています。また、実践の評価や研究を広く普及していく上での難しさもあるように思います。日本国内では、多くの素晴らしい実践報告や論文がありますが、残念ながら、国外の研究者に読まれる機会は少ないのではないかなあと感じます。日本の介護の先進的で素晴らしい取り組みについての英語での発信は、海外の研究者や実践者としては、日本の素晴らしい取り組みを学ぶうえでは非常にありがたいです。一例ですが、私自身、過去に日本語で

自分が執筆した論文を再度入手しようとした際にもかなり苦労した経験があります。結局、知り合いの研究者を通して自分の書いた論文を送ってもらわなければなりません。私の限られた経験ではありますが、日本の介護実践は大変素晴らしいと思いますので、言語的なチャレンジもあるかとは思いますが、日本の実践や研究がもっと海外の研究者や実践者に知ってもらう機会が増えることを願っています。綾部: ストレングスモデルでは視点をどう具体的に実行にうつしていくのか、学びのあるインタビューでした。また、海外への日本の介護研究の発信もすることが大切だと感じました。海外の関係者が当学会のホームページをみつけ、目を通してもらえるような工夫も学会の役割として重要だと感じました。アメリカと日本の時差があるなか、貴重なインタビューの時間をいただきありがとうございました！これからも、福井さんご自身の教育と研究活動を通してお互いの国のプラスの影響につながるような役割をぜひ担っていただきたいと思っています！



今回のインタビューの感想

福井さんのアメリカでの暮らしや仕事等の話からさまざまなことにチャレンジしている方だと感じました。多様性のあるアメリカで、日本とは違う文化や習慣のなかで生活をし、就労することはご苦労もあると思います。日本の教育・研究者と他の国が互いにプラスになるような研究への姿勢もあり、福井さんの今後のさらなるご活躍を期待しています。

2023年度 海外の国際学会のご案内

海外の国際学会(2023年度開催)のご案内です。ハイブリッド型等オンライン開催の学会が多くなっております。日本からのオンラインを通じた参加や発表を通して海外の参加者との交流を深めてみませんか。(コロナ禍の状況のため、情報が変更される場合もあります。学会にご関心のある方はご自身で直接学会ホームページをリアルタイムで情報を確認するようにしてください)

① 13th annual ICFSR Conference International conference on frailty and sarcopenia research(ICFSR)2023

会期:5月22~24日 ※ハイブリッド

開催国:トゥールーズ(フランス)

公式HP:<https://www.frailty-sarcopenia.com>

学会の簡単なお紹介:“虚弱高齢者”や“介護予防”等をキーワードにしています。また、“健康寿命”を考える上でも学びのある学会です。

② International Conference on Integrated Care(ICIC)

会期:5月22~24日 ※ハイブリッド

開催国:アントワープ(ベルギー)

公式HP:

<https://integratedcarefoundation.org/events/icic23-23nd-international-conference-on-integrated-care>

学会の簡単なお紹介:“統合ケア”に特化した、伝統のある国際学会です。ケアを受ける当事者やその家族については参加費を無料にするなど、“専門家だけの学会”にならないようにしていることも特長の一つです。当事者を中心においた支援の視点について学ぶことができます。

③ Nursing Home Research International Conference

会期:未定

開催国:未定

公式HP:<https://nursing-home-research.com>

学会の簡単なお紹介:高齢者施設の現場における入居者、実践者、運営、イノベーション等をキーワードにした学会です。先進国では今後数十年で施設入居者数の増加が顕著であると予想されています。学会では施設での実践のアイデアや研究成果を共有することを目的にしています。

④ IAGG Asia/Oceania Regional 2023 Congress of Gerontology and Geriatrics The International Association of Gerontology and Geriatrics

会期:6月12~14日※対面式

開催国:横浜(日本)

公式HP:<https://www.iagg2023.org/index.html>

学会の簡単なお紹介:“老年学”“老年医学”“高齢者”“老い”等をキーワードにしたアジア・オセアニア地域の老年系学会です。医学、介護福祉、看護、心理、教育等の分野から発表されており、幅広い視点で学ぶことができます。今年は日本(神奈川県・横浜)が開催地です。

⑤ 52nd Annual Conference of the British Society of Gerontology(BCG)

会期:7月5~7日※対面式

開催国:ノーフォーク、ノリッジ(イギリス)

公式HP:<https://www.britishgerontology.org>

学会の簡単なお紹介:英国老年学会です。今年の大会テーマは「高齢化による包括的な参加:すべての人のための社会の創造」です。

会費納入のお願い

本会は会員の皆様の会費により、運営しております。近年、会費未納により退会となる事例が問題となっております(会費を3年滞納された場合は、理事会の承認を経て退会処理となります)。

学会運営の健全化を導くうえでも、会員の皆様の会費の納入率の向上が必須です。どうぞ宜しくお願い致します。

正会員:9,000 円 学生会員:3,000 円

《会費振込口座》

◎郵便振替口座

00180-7-417389

加入者名:日本介護福祉学会

(他金融機関からのお振込みの場合)

〇一九(ゼロイチキユウ)店 当座 0417389

◎みずほ銀行 江戸川橋支店(545) 普通預金

口座番号:1213646 口座名義:日本介護福祉学会

(ニホンカイゴフクシガツカイ)

▼お問い合わせ先▼

〒162-0801

東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

日本介護福祉学会 事務センター

TEL:03-6824-9378, FAX:03-5227-8631

E-mail:jarcw-post@as.bunken.co.jp

ホームページ・リニューアルのお知らせ

学会ホームページのデザインがリニューアルされました。新サイトでは、当学会の活動領域として、「実践・研究領域」を示したほか、学会通信も一般に公開し、介護福祉に関係する多くの方に参照いただけるよう、再構築いたしました。

学会ホームページは新サーバーでの運営となるため、現サイトの新サーバーへの移行を2023年3月末までに行い、4月にデザイン部分の変更を行う予定です。

また、新サイトのデザイン等につきまして、改善のご意見がある場合は、5月中に日本介護福祉学会までご意見をください。ご意見は可能な限り反映させていただきます。新サイトのトップページに掲載する写真も募集しております。

移行当初は、予期せぬ不具合などがあるかもしれませんが、会員の皆様によりご活用いただけるサイトとしていきたいよう運営してまいります。

ホームページリニューアル検討会

委員 柘崎京子、堀崇樹、坂本毅啓

協力 鈴木俊文

編集後記

鈴木理事や、海外で活躍されている福井氏のインタビューを拝見し、自分が何者でもない人間だと痛感し恥ずかしくなっております。量的研究か、質的研究のどちらかが専門かと尋ねられると口ごもり、原理領域か、援助領域かと問われるとどちらかと言えば、逃げ口上となっているそんな自分です。でも介護現場に寄与する研究をしたいという熱い思いだけには自信があります。だからこそ、学会での学びや出会いの場は、私にとっての原点回帰の場であり、羅針盤だと感じています。

今号では第31回日本介護福祉学会大会のご案内、ホームページのリニューアルについての記事がございます。

今後も皆さまからの発信に力をいただきながら、介護福祉の「場」で自分にできる何かを探していきたいと思っております。(の)

第10期広報委員会

理事 野田 由佳里

理事 堀 崇樹

評議員 金山 峰之

評議員 午頭 潤子